

8601 丘や森がするするすべっていく。

丘や森がするするすべっていく。雪に覆われた丘は、腹を銀や白や灰色に光らせ牧場らしい木柵に区切られながら、まるで呼吸でもするように膨れたり萎んだりしていた。黒い木々はクリスマスツリーそっくりに雪をのせ一つ一つの木が大きくて何だか怒っているみたいに時々身震いしては、粉袋をぶちまけたような雪の塊を落した。丘も森も、広くて奥深くてどこまでも同じようで、和香子が知っている関東の丘陵や雑木林とはまるで違う。荒々しくて、人を寄せつけぬ様子で、その反面淋しげで人なつっこい感じもする。和香子は雪森厚夫に似ていると思い、向いの席に目を向けた。

加賀 乙彦『湿原』

[許容訳例]

Hills and woods were slipping by outside. A chain of snow-capped hills, they seemed to swell and dwindle as if they breathed, with their sides glittering silver, white and grey and divided maybe into pastures by wooden fences. The dark trees, covered with snow, looked just like Christmas trees; they were big and from time to time, shuddering as though in anger, would drop a mass of snow which looked like an emptied sack of flour. The hills and woods were quite different in their width, profundity and homogeneity from the hillocks and copes of Kanto that Wakako was familiar with; they looked wild and unapproachable yet at the same time somehow lonesome and amiable. Reminded of Atsuo, Wakako turned her eyes to the opposite seat.

[翻訳例]

Uplands and forest were slipping past outside. Snow-covered, the uplands glittered silver, white and grey on their flanks, divided up by wooden fences suggesting pastures: they swelled and shrank, for all the world as though alive and breathing. The trees, black and topped with snow like Christmas trees, were big and from time to time one of them, with an angry-looking shudder, would let fall a lump of snow like someone emptying a bag of flour. Uplands and forest alike were vast and deep relentlessly uniform, quite different from the hills and woods of the Kanto district that Wakako was familiar with. They were wild and unapproachable, yet at the same time had an air of loneliness and wanting to be friends. Rather like Atuo, thought Wakako, and turned her gaze to the seat opposite.

■丘や森がするするすべっていく。(8601)

★「丘」は、は hills でも間違いありませんが、後に出てくる「丘陵」と区別して uplands を使うといいでしよう。ここでは無冠詞複数で uplands とか、あるいは a chain of uplands としてもいいでしよう。

★「森」ですが、ここでは舞台が北海道のようですから、奥深い広い原始的な森という感じで forest がいいでしょう。woods は人里近いというか、親しみやすさが感じられます。下の方に出てくる「関東の雑木林」などに相当します。なお、forests と複数にすると、少々大きさになります。

★「するするすべっていく」→「(するする) すべっていた」は were[went] slipping[gliding] past[by]くらいでしょう。なお、slide は to slide over the table; to slide along the ground などのように、何かに接触している場合が多く、sliding になると大地がじっとしていて、その上を丘は森が滑っていく感じになります。それに反して slip とか glide は何の抵抗もなく自然にすべっていくという感じです。

◆不定冠詞・無冠詞複数

「丘や森が・・・」と始めて現れる名詞を There were hills and forest…ではなく Hills and forest were…と書くことが出来るのは「不定冠詞+名詞」や「無冠詞複数の名詞」には There is [was; are; were]…が含まれているからです。たとえば、He entered the room. On the table, a cat was drinking milk.と言う場合、この a cat…には There was a cat there, and it was…という意味が含まれているわけです。ですから、There were hills and forest slipping past.としないで Hills and forest were slipping past.とすることが出来るのです。

◆過去進行形

日本語では目の前で何かが展開している状況を英語より自由に「現在時制」で表現することが出来ます。「丘や森がするするすべっていく」もそうです。もちろん、英語にも「劇的現在」という使い方がありますが、この部分だけ現在時制を使うことはできません。全体を「過去の時制」で統一しなければなりません。それでも、日本語の持っている「目前性」は訳出しなければならないという視点で眺めると、この日本文の「(そのとき目の前では) (相互未了解の) 丘や森がするするすべっていた」という感じを表すよう努めなければなりません。そこで、その「臨場性」を過去進行形で表し、汽車の窓から眺めているという状況を暗示させる outside を加えることで「目前性」を表すことになります。Uplands and forest were slipping past outside.です。

■雪に覆われた丘は、腹を銀や白や灰色に光らせ牧場らしい木柵に区切られながら、まるで呼吸でもするように膨れたり萎んだりしていた。(8601)

●「連体修飾節+不定代名詞的体言（雪に覆われた丘）→分詞構文

「雪に覆われた丘は」は「連体修飾節（雪に覆われた）+体言（丘）」ですから、英語では「名詞(uplands)+関係詞節(which was covered with snow)」か、あるいは、これを短絡化した A chain of snow-covered uplands…も英語としては可能な表現ですが、そうすると、「(もともと [平常用的] 雪に覆われた丘があって) その丘は・・・」の意味になってしまいます。ところが、この日本文は「(いま見ているその丘は) 雪に覆われていて、それは・・・」(The uplands were covered with snow and they...)という意味であるように感じられます。したがって、The uplands, covered with snow, …とすれば、このような一時性を含

ませることができます、日本語の修飾語の位置どおりに英語に変換するとなると、分詞構文を使って、Snow-covered, the uplands [hills]…とするのが適切であると思われます。これは、たとえば、「日露戦争に勝った日本は…」を Having won the war against Russia, Japan…と訳すのと同じです。なお、snow-capped を使うと高い山のイメージになってしまいます。

★「腹を銀や白や灰色に光らせ…」は、‘(with)+O+C’の型を使うことが出来ます。次の「まるで呼吸でもするように膨れたり萎んだり…」からわかるように、人間か動物が横たわっているようなイメージですから「腹」は side を使って with their (hill-)sides glittering silver, white or [and] gray でもいいですが、「わき腹」を意味する flank を使って、(the uplands), glittered silver, white or [and] grey on their flanks か、主語を The snow-covered flanks of uplands [hills] にして glittered silver, white or [and] grey とすることもできます。

★「光らせ…」は glitter がいいです。これはちょっと金属的で冷たい感じがあり、雪の場合によく使います。なお、twinkle も間違いではありませんが、これはごく小さな光か、あるいはずっと遠い光に使います。gleam も「光る」ですが、これは点滅しないのでここでは使わない方がいいでしょう。glimmer は、たとえば、The dying fire glimmered at the far end of the room. のように、ほのかに・かすかに見えているという感じで、非常に弱い光で、ここでは使えません。

● [や] (選択・同時)

「腹を銀 [や] 白 [や] 灰色に光らせ」の [や] は、時間の経過や見る位置の変化によって「銀 [や] 白 [や] 灰色」に光って見えたのか、また部分的に「銀 [や] 白 [や] 灰色」に見えたのかによって連結辞が変わります。前者なら or であり、後者なら and です。ここは車窓からの眺めなので時間・位置が変わるので or にしたいところですが、and にしても間違いとは言えません。

★「牧場」は pastures とか farms とすればいいでしょう。ただし、farm の場合には働く人とか家などがイメージの中に入ります。meadow というのは自然のままの草地・原っぱをさすことが多いので、ここでは避けた方がいいです。

★「牧場らしい木柵」の「らしい」は、表現の仕方によって maybe とか perhaps とかを使うことができます。また seemingly; apparently は、どちらも間違いではありませんが、何か判断の理由を表すような具体的な感じが伴って、ちょっといきすぎのような気がします。

★「木柵」は wood fences ではなく wooden fences とするのが普通です。

● 「隠れ連体修飾節+体言」(牧場らしい木柵)

「牧場らしい木柵」は「(実はちがうのだが) 牧場のように見える木柵」(wooden fences (that looked) like pastures)ではなく「牧場とおぼしき木柵」という意味ですから suggest を使って「連体修飾節(wooden fences)+関係詞節(which suggest [suggesting] pastures [farm])」がいいと思います。

★「～に区切られる」は divided より divided up あるいは partitioned by がいいでしょう。divide というのは、はじめから二つのものがあって、その間に何か切りがあるということ

を伝えるものです。たとえば、The two countries are divided by a river.のように、これに対して divided up は一つのものが何かで区切られているということを意味します。また be railed off という表現もありますが、これは‘区切られた二つのものが絶対一緒にならないように’、あるいは、The lawns in that park are railed off.のように、‘人が入らないように仕切る’という場合に使う表現です。

★「まるで呼吸でもするように」の「まるで・・・するように」には(for all the world) as though…とか just as though…という定型化した表現があります。したがって、ここは…, (for all the world) as though (they were) (alive and) breathing でしょう。なお、自然な英語にするなら「まるで生きていて呼吸でもするように」という意味で alive and を加えたほうがいいでしょう。もちろん、加えなくても間違いとは言えません。なお、as if they breathed も可能ですが、いくらか文語的で poetic な感じになります。19世紀までの英語では進行形は確立していませんでした。たとえば、19世紀アメリカの女流詩人エミリー・ディキンソンの Because I could not stop for Death に始まる有名な詩の第三スタンザのはじめの二行は

We passed the school where children played,
Their lessons scarcely done;

となっていますが、この played は、現代なら were playing ですから「学校のそばを通ると、子どもたちが遊んでいた、／（ああ）授業が終わったばかりなんだ。」です。

★「～でも」に当たる言葉としては普通会話などでは just as though they were breathing or something とか, just as though they were, for example [say], breathing のように補いますが、ここでは、この「でも」にあたる言葉を入れると、必要以上に細かくなり、せっかくの文学的な感じが損なわれてしましますから訳さない方がいいでしょう。

★「膨れたり萎んだりしていた」は(they) swelled and shrank [subsided] です。「萎む」に dwindle も使えます。

◆過去進行形と過去時制

「・・・していた」となっているからと言って、(they) were swelling and shrinking と進行形にすると、実際に膨れたり萎んだりしていて、「その時、別の動作が起こった」ことを予測させてしまうので、過去時制(swelled and shrank)でないと文が完結しません。日本語の「・・・していた」は、「過去の目前の進行動作」にも「過去の状態」にも使われます。たとえば、「彼は一日中公園のベンチに座っていた」という文を完結的にするには He sat on a bench in the park all day long. と過去時制で表すことになります。

●「情報（イメージ）順」に訳す

詩や小説ではイメージの展開が重要ですが、イメージの順序はどの民族でもほぼ同じです。ただ、それを伝える言語には固有性があり、それを無視することは出来ないので、変換

したときに必ずしも元の順序になるとは限りません。しかし、できる限りイメージ順になるように努力すべきです。この「雪に覆われた丘は、腹を銀や白や灰色に光らせ牧場らしい木柵に区切られながら、まるで呼吸でもするように膨れたり萎んだりしていた。」を出来るだけ情報（イメージ）の順に訳すには、まず、日本語の {単位情報}（情報の塊・イメージ）に対応する英語の {単位情報}（情報の塊・イメージ）を作ります。

雪に覆われた丘は	Snow-covered, the uplands
腹を銀や白や灰色に光らせ	glittered silver, white and grey on their flanks
牧場らしい木柵に区切られ	divided up by wooden fences suggesting pastures
まるで呼吸でもするように	(for all the world) as though (they were) (alive and) breathing
膨れたり萎んだりしていた。	swelled and shrank

のように、それから「情報の塊」（{単位情報}・イメージ）の配列を「連結辞」を意識しながら「A は B し C しながらまるで D のように E していた」と簡略化します。そうすることによって、文全体の構造と使用できる「連結辞」（接続詞・関係詞・準動詞・コロン・セミコロンなど）の見当がつきます。等価変換（翻訳）の品質は、この「連結辞の選択と技巧」にかかっていると思われます。上の対応する英語情報の塊を「英語の文になるように」まとめると、次のようになります。

Snow-covered, the uplands glittered silver, white and grey on their flanks, divided up by wooden fences suggesting pastures: they swelled and shrank, for all the world as though alive and breathing.

なお、they swelled and shrank, は分詞構文にして now swelling, now shrinking とすることも出来ます。

■黒い木々はクリスマツリーそっくりに雪をのせ一つ一つの木が大きくて何だか怒っているみたいに時々身震いしては、粉袋をぶちまけたような雪の塊を落した。（8601）

★「黒い木々」は the black trees とすると、「黒い木々」というカテゴリーが出来て「いつも黒い木」という意味になります。ここで言いたいのは「木々は、黒く(見えて)・・・」ということですから The trees, black and …とします。なお dark でもいいのですが、ここでは black の方がコントラストがはっきりします。

★「クリスマツリーそっくりに」は「実際はクリスマツリーではないのだが）クリスマツリーのように（見え）」ということで、(looked) (just) like Christmas trees [like a Christmas tree]でしょう。

★「雪をのせ・・・」は covered [topped] with snow です。

★「一つ一つの木」は they でもよいし one of them も使えます。

★「大きく・・・」は were big です。このような文章では big に so など付けない方がいいと思います。たとえば、She decided to stop and have a rest. She was so tired. のように主観

的な気持ちを表す場合とか、so…that のように特定の意味を表す場合以外は so を単独で使わない方がいいのです。女性が会話などでよく使うので、女性っぽいと感じる人もいます。

● [て] (順次同時)

「大きく [て] …」の [て] は、後の「(何だか怒っているみたいに) 時々身震いして～を落した」と「順次同時」の関係にあります。and で結びます。

★ 「何だか怒っているみたいに」は as if[though] (they were) somehow angry です。with a certain anger も使えなくはありませんが、「何だか」に一番いいのは somehow だと思います。

★ 「時々」は from time to time です。他に occasionally (時折) ; sometimes (たまに) ; once in a while (間を置いて) が考えられます、それぞれニュアンスが異なります。

★ 「身震いする」は shudder です。これはかなり大きく震えることです。

● with (付帯状況) を使う

「何だか怒っているみたいに身震いして」は shudder as if (they were) somehow angry と書くこともできますが、shudder を名詞として使って、ひとまとめにして with a shudder as though of anger とか、with an angry-looking shudder とすることも出来ます。

★ 「粉袋をぶちまけたような雪の塊…」はそのまま訳出することは出来ません。というのは「粉袋をぶちまけたような（白い粉）」と「雪の塊」とがイメージとして結びつかないからです。「粉袋をぶちまけたような」は「(白い) 雪」だけを修飾して「塊」にまで及ばないのでしょう。つまり、筆者が言いたいのは「誰かが粉袋をぶちまけるみたいに一面の白い雪が塊となって落ちた」ということだと思います。それで、「(誰かが)粉袋をぶちまけるみたいに」は as though [like someone] emptying a bag of flour とします。「ぶちまける」は scatter でもいいのですが、ここで使うとなると scatter the contents of a bag of flour とせざるを得ないので不適切です。

★ 「雪の塊を落した」は let [would let] fall a lump of snow です。let fall の代わりに dislodge (引っかかった物を落とす・払いのける) を使ってもいいと思います。また、drop でも間違いではありませんが、これは子供がボールを落とすというような感じで、何か直接的な感じがします。それから lump の代わりに mass を使うと量の多いことを強調することになります。

● 「隠れ連体修飾節+体言」(粉袋をぶちまけたような雪の塊)

「粉袋をぶちまけたような雪の塊」は、一時性をはっきり出すと「粉袋をぶちまけたように見える雪の塊」ですから「連体修飾節(粉袋をぶちまけたように見える)+体言(雪の塊)」です。英語では「名詞(a lump of snow)+関係詞節(which looked like an emptied sack of powder)」とすれば、原日本文をそのまま変換したことになります。論理的には不十分ですか、許容範囲ではないかと思われます。

● 「情報 (イメージ) 順」に訳す

「黒い木々はクリスマスツリーそっくりに雪をのせ一つ一つの木が大きくて何だか怒っ

ているみたいに時々身震いしては、粉袋をぶちまけたような雪の塊を落した。」のイメージの順序は

黒い木々は
クリスマスツリーそっくりに雪をのせ
一つ一つの木が大きくて
何だか怒っているみたいに時々身震いして
粉袋をぶちまけたような雪の塊を落した

です。上で説明した語彙・表現を、この順序に並べると

The trees, black
and topped with snow like Christmas trees,
were big
and from time to time one of them,
with an angry-looking shudder,
would let fall a lump of snow like someone emptying a bag of flour.

で、だいたいイメージ通りになります。

■丘も森も、広くて奥深くてどこまでも同じようで、和香子が知っている関東の丘陵や雑木林とはまるで違う。(8601)

★「丘も森も」は了解情報ですから The uplands and forest ですが、(All of them [Everything],) Both uplands and forest [Upplands[Hills] and forest alike] としてもいいです。ここで定冠詞を使っていないのは、(All of them [Everything],)という含みがあるからで、ちょっと文学的になります。Both the uplands and the forestと同じになります。

★「広くて奥深くてどこまでも同じようで」の「どこまでも」には「少しあは変化しても良さうなものに（どこまでも）」というニュアンスが感じられます。英語では vast and deep [profound] and relentlessly uniform とすれば、その感じを出すことができます。relentlessly というのは直訳すると「容赦なく；厳しく」というかなり強い意味になりますが、英語ではこのような言葉でもごく普通の感じで使うことがよくあります。uniform というのは「何のけんかもない」というニュアンスです。ですから relentlessly uniform という表現は「もうすこし変化があってもいいと思うほどどこまでも同じで」という感じになると思います。なお、ここは、次の「～とは違う」と合わせて「・・・の点で～と違う」とすると、different in their width, profundity and homogeneity from～と名詞を使って書くこともできます。

★「和香子が知っている」は「和香子が慣れ親しんで知っている」ということですから Wakako was familiar with [knew]～くらいです。

★「関東の丘陵や雑木林」は、はじめの「丘と森」と対照的に用いられているわけですから、それなりの工夫が欲しいところです。すぐ上で、いま見ている「丘と森」を「広くて奥深くてどこまでも同じようで」と描き、また、すぐあとで「荒々しくて、人を寄せつけぬ様子で、その反面淋しげで人なつっこい」と描いています。となると、「関東の丘陵や雑木林」は、修飾語句こそついていませんが、それとは反対のイメージが出てくるような単語を用いなければなりません。the hills and woods of the Kanto districtです。「丘陵」は「丘(hill)がいくつか連なっているもの」(hills)と考えます。また、hillocksとかcopses(雑木林)を使って「丘(hills)と森(forest)」と対照させてもいいでしょう。なお、different in their ~…と名詞を使いたいなら from their counterparts in Kantoと書くこともできます。

★「…とはまるで違う」という日本語の現在時制は、和香子のその瞬間の気持ちを言ったものですが、英語では「…とはまるで違っていた」と過去時制にせざるをえず「広くて、奥深くて、どこまでも同じようで(→何の変化もなくて), …とまるで違っていた」です。were A and B and C, (being) quite different from~と分詞構文を利用すると、‘認識の同時性’をあらわすことができます。

● 「連体修飾節+体言」(和香子が知っている関東の丘陵や雑木林)

「和香子が知っている関東の丘陵や雑木林」は「連体修飾節(和香子が知っている)+体言(関東の丘陵や雑木林)」です。英語では「名詞(the hills and woods of the Kanto district)+関係詞節(that Wakako was familiar with)」となります。

■荒々しくて、人を寄せつけぬ様子で、その反面淋しげで人なつっこい感じもする。(8601)

★「荒々しくて、人を寄せつけぬ様子」は they looked [were] wild and unapproachable…ぐらい。なお、inaccessibleは「手の届かない」という意味ですが almost inaccessibleとするなら使うことができます。

★「様子」は後に出てくる「感じもする」とほぼ同じ内容なので、一つにまとめて lookedを使うといいと思いますが、wereでもいいでしょう。

● [で]

[で]は基本的には「同時・順次」を表します。ここでは[で]の前に[て]があるので「A て B で、その反面」ですから‘A and B and [yet] at the same time…’となりますが、[yet]の前の and は省いて使う方がいいです。

★「淋しげ」は have an air of loneliness ぐらい。(somehow) lonesomeも間違いではありませんが、少し可愛い感じが入るように思われます。

★「人なつっこい」は「警戒心がない」を含むとすれば wanting to be friends がきまり文句です。なお、amicableにも amiableにも「近づきたがる」という意味はないので、ここでは勧められません。このような形容詞は、たとえば、an amicable gentlemanのように、次に続く名詞と一緒にになってイメージが出来ているので使いにくいのです。

■和香子は雪森厚夫に似ていると思い、向いの席に目を向けた。(8601)

★「和香子は雪森厚夫に似ていると思い」は rather like Atuo, thought Wakako, and…とか、

Reminded of Atuo, Wakako…などでしょう。

★「向いの席に目を向けた」は turned her eyes [gaze] to the opposite seat ぐらい。ただし、the seat opposite の方が座りがよい英語になります。

●固有名詞の処理

「和香子は雪森厚夫に似ていると思い、向いの席に目を向けた」ですが、英語の習慣として、文の途中では、人名を full name にしないので、「雪森」か「厚夫」かのいずれかにしなければなりません。ここでは「厚夫」を用いた方がいいでしょう。